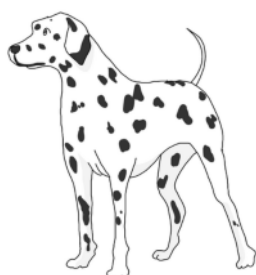


Sie sind nicht mein Meister.



Cast

Paul von Oberstein
DAS der Hund
Engel Kabel
Karl Kabel
Rabenard
Der alte Hund

Story

Makoto Nekoya

子供は天使のように無邪気だ。彼らには何の罪もない——大人たちはしばしば、ありもしない理想や願望を一方的に子供達の姿に重ね合わせようとする。しかるべき教育やしつけや教育を与えられなければ、彼らの行動を支配するのは猿と祖を同じくする野獣と何も変わらない。ただ本能のみだ。

いや、もつと悪いのは本能を助長するような中途半端な教育を与えられた子供だ。

「おい、何とか言えよ。お前は、存在をゆるされない、劣等な人間なんだって教えてやってるんだぞ」

その最悪な、人の形をした小さな獣^{けもの}が、憎々しげに歯を剥き出しに罵声を浴びせてくる光景が、パウルにはまるで3D TV^{ソリグワイション}の映像のように奇妙に現実感を欠いて見えた。

パウル・フォン・オーベルシュタイン。爵位こそ持たぬものの、帝国の官僚界ではそれと知られた貴族の一門だった。家系は旧くルドルフ大帝の時代にまで遡ると、オーベルシュタイン家の当主は主張するが、これは定かではない。はつきりとオーベルシュタインの名が帝国軍、あるいは帝国の官界に刻まれるようになったのは、ここ一〇〇年余りの間であるらしかった。

「おい、何黙ってんだよ！」

また声が飛んでくる。

「返事できないんだよな、お前、恐れ多くもレアツクイデンシハイジヨホウに違反しているんだからな」

口調の憎々しさにくらべて奇妙にたどたどしいアクセントと発

音が、彼らが『劣悪遺伝子排除法』の本来の意味など知ってはいないことを語って余りある。彼らは単に、いじめの相手を『一方的に殴りつけることのできる棒』としてレッzakイデンシハイジヨホウというものがあると知っているだけのことなのだ。

「おい、レッzakイデンシハイジヨホウってなんだっけ？」

「ルドルフ大帝陛下がお定めになったテーククノホソウだよ。違反したら生きてられないんだ」

「こいつ、大帝陛下のテーククノホソウに違反しているくせに、帝国の人間でございますって顔でいやがるのさ」

「どこ、違反してんだっけ？」

「目だよ、こいつ、目が無いんだ。生まれつき目がなくせに、機械の、偽物の目でこまかしてやがるんだ」

瞼の辺りをつつこうとして複数の手が伸びてくるのを、パウルは素早くバックステップして避ける。急激な身体の動きが、視野を不安定に震わせ、吐き気を伴って足許をふらつかせるのを辛うじて耐えた。

パウル自身は義眼に嫌忌の気分は欠片ほどもない。本来、一生を視野を閉ざされた中で過ごさねばならなかった自分が、常人同様の視力を得られているのも義眼のおかげだった。

ただ、今日は時期が悪い。

身体の成長に合わせる必要があるため、一定の年齢に達するまでは義眼と視神経の嵌合手術を定期的に受けなければならない。数日前に受けたのがその処置だった。術後数日は義眼と視神経が馴染ま

ない……両者の信号レベルに微妙な違いがあつて、フィードバックを受けた義眼がレベルを調整する時間が必要だった。その間、義眼の映す映像と、肉体……正確には脳だ……が認識する映像にずれが生じて、めまいや吐き気となつて現れることが多い。今が、丁度その時期だった。

いつもなら、この連中に絡まれる前に道を変えるか、逃げ足の速さにものを言わせるか……見かけによらず、脚には自信がある……、あるいは……。だが、今日は目の具合の理由で、肉体にいつもの反応速度を期待することはできなかった。この少年達もそうした事情を見透かして、待ち伏せをかけていたに違いない。

「おい、逃げるな！」

「そうだ。俺たちはお前をキュダウンしてるんだぞ。恐れ多くもテーククノソウホであるレッzakイデンシハイジヨイホウに反して、偽物の目をつけてこまかすなんて、許されないハギャंकクウイなんだってな」

『劣悪遺伝子排除法』や『帝国の祖法』と同じく、『糾弾』も『逆行為』も単なる音として発音しているに過ぎない。知識をひけらかすつもりでことごとく発音を誤っているのが笑止だった。自分を取り囲んだ数人の同年代の少年たち。犯罪者を糾弾しているにしていかににも楽しそうに、歯茎まで剥き出しのにやにや笑いを浮かべた彼らの表情は、すでにパウルにとって珍しくも、ましては恐ろしいものでもない。

「ぼくに何を要求しているんだ、君たちは？」

「けつ、目無しのくせに『ぼく』だつてよ！」

「いつちよまえに言葉しゃべつてやがんの」

少年達がひとしきり、数百年、あるいは数千年も前から連綿と受け継がれてきたステレオタイプな野次を吐き散らすのをバックに、リーダー格らしい妙にどす黒い顔色の少年が一步踏み出した。

「だ〜か〜ら〜、お前はハクギャンコワイをおしている、悪い奴なんだつてことさ」

「悪い奴？」

「そうさ、悪いやつさ。悪い奴は……」

リーダー格の少年がパウルの奥襟を掴む。いつもならそんなに簡単に襟を掴まれることはないのだが、今日は反応がどうしても一瞬遅れる。

「ほつら、こつやつて、俺たちにごめんなさいって謝るんだよっ！」

そのまま馬鹿力で地面に向かって引き倒されそうになる。少年の意図は明らかだった。パウルを地面に押さえつけ、義眼の少年を足許に跪かせようというのだ。学校では彼らが足許にも寄れない優等生……学業ばかりではない、スポーツに於いてもパウルの遙か後塵を押し続ける屈辱を、彼らは味わわされてきた。

「一人では勝てないから五人がかりとは恐れ入るな」

無理矢理引き倒されそうになりつつも、パウルの舌鋒は言葉の形をした氷の矢を放ちつつけた。

「君たちの栄光ある門閥貴族の誇りとやらは、言葉でも腕でも太刀打ちできない相手を、複数の人間で袋だたきすることなのか

い？」

「何を——！」

「劣悪遺伝子排除法のための理由による出生者の無条件処刑は、帝国暦三四八一年一月のマクシミリアン・ヨーゼフ二世陛下の勅語によつて実施を無期限に凍結されている。確かに劣悪遺伝子排除法は大帝ルドルフ陛下のお定めになった帝国の祖法だが、マクシミリアン・ヨーゼフ二世陛下のご決定もそれに劣るものじゃない」

いきなり自分たちの知識も理解も超える言葉を叩きつけられて、少年達の表情が一瞬空白になる。無論、パウルは口から出任せを言つたわけではない。マクシミリアン・ヨーゼフ二世が悪名高いルドルフの遺法の有名無実化に力を尽くしたことは、帝国史に少しでも関心と知識のある者にとつては自明以前の事実だ。自らの身体的条件からして、パウルもまたそうした一人だった。

次の瞬間、パウルが繰り出した右膝が、見事にリーダー格の少年の鳩尾に埋まつた。悲鳴とも呻きともつかない奇怪な叫びと共に、少年は掴んでいた奥襟から両手を離す。そのまま、折りたたみナイフのように身体を二つに折ると、路面に転がつてのたうち回る。

手加減は余計だった。暴力は性に合わないが、言葉で言い負かされれば、前に増した暴力で応じてくる。それが、この少年達。帝国の支配者層であるはずの、門閥貴族の子弟たちであり、一三歳のパウル・フォン・オーベルシュタイン少年の、敬愛すべき同級生たちだった。

身体が自由になると、少年達の包囲網が手薄な右側へダッシュす